

令和元年度 チーム 新・湯治セミナー in 雲仙温泉 地域の資源としての温泉と今後の町づくりを考える

環境省では、雲仙市と共催で、令和2年2月14日に雲仙温泉でチーム新・湯治セミナーを開催しました。温泉資源の保護とともに、現代の旅行者のニーズにあった滞在空間の創出等に取り組んできた温泉地の事例報告から、地域特有の資源を中心に、温泉を核とした町づくりについて、「チーム新・湯治」チーム員や地元関係者の皆さんと一緒に考えました。



「雲仙温泉の活性化」 雲仙市長 金澤秀三郎 氏



雲仙温泉には、他の温泉地には無い国立公園の厳しい規制があるからこそ守られている美しい自然と景観美があり、これらは地元住民を中心に自然保護保全活動を継続的に行ってきた賜物である。平成23年には「雲仙プラン100」を策定し、温泉街全体としての魅力向上に尽力してきた。また、今年度から3ヵ年をかけて「雲仙市観光戦略」を策定する。シンボルである「地獄」をハード、ソフト両面で磨き上げることが重要であり、今年度は、環境省「国立公園利用拠点滞在環境等上質化事業」を活用し、雲仙温泉地区の上質化計画を作成している。雲仙地獄内の四阿(あずまや)・引湯管等の再整備、老朽化したホテルの解体等を通じて、雲仙温泉の更なる魅力の向上を図っていく。その土地で築いてきた歴史と、唯一無二の素材を最大限活用し、新たな時代に即した持続可能な町づくりについて、地元、行政、民間事業者の総力をあげて挑戦していきたい。

事例紹介① 「城崎温泉の まちづくり～

～これまでとこれから～

城崎温泉旅館協同組合
政策特別委員会
特別委員長
西村総一郎 氏



- 城崎温泉は今年開湯1300年で、昔ながらの温泉街の風情が残る。城崎温泉を代表する四字熟語は「共存共栄」。そこに住む人々がこの理念を共有し、町をつくっている。町のコミュニティが強く、町全体を一軒の旅館として捉えて発展していこうという思いが強い。お客様が、7か所ある外湯に入るために町に出ることで、お金が町の中に落ちる仕組みとなっている。
- 泉源管理は湯島財産区が行っている。集中管理による配湯をしており、収容人数に応じて旅館の大浴場の浴槽容量制限をするなど、外湯を守るための城崎ルールがある。温泉使用料のほか、契約入浴料制度があり、旅館が財産区に1人泊200円の温泉入浴料を払うことでお客さまは外湯に制限なく入れる。このように財産区には、お金を着実に集める機能があり、外湯は最大の集客装置になっている。
- 町づくり会社「株式会社 湯のまち城崎」(平成24年設立)は、城崎が持つ資産の有効活用等で組織を強くするなど3つのステップで事業を進めており、様々な事業展開を行っている。最近では、海外の大学生のインターンシップ受け入れ、着地型観光事業、旅館改装、火災復興事業などを実施している。
- 今後は年間80万人泊を確保したい。そのためには、イベントではなく、町のもつ根源的な魅力を高めなくてはならない。そぞろ歩きができる町づくりのため、大型駐車場をつくり自動運転バスを走らせて温泉街の車の台数を減らす、バイパス建設で町の中を一方通行にすることなどを考えている。
- 世界的な観光地になることを目標にまちづくりをしている。人口規模や経済規模が小さくても世界から尊敬される町でありたい。

事例紹介② 「地域で守る 温泉資源」

公益財団法人
中央温泉研究所
第二部 主任研究員
大塚 晃弘 氏



- 熱源や水の起源により一口に温泉と言っても様々なものがあるが、その多くは、降水が地下に浸透し、熱を得て上がってくるという水循環の中にある。長い時間をかけて形成されている限りある資源であり、大切に使う必要がある。
- 低炭素社会を目指して温泉の保護と利用を両立させるため、持続的かつ安全な温泉利用が求められている。利用する温泉の特徴を理解し、湧出量等資源の状態をよく知ることが重要である。
- 温泉モニタリングによる自主管理は自身の源泉と地域の温泉資源を守るために必要。モニタリングデータを広く情報共有することで地域全体の解析も可能となり、適正利用に役立てられる。
- 近年、温泉エネルギーの様々な分野での利用に期待が高まっている。利用の促進にあたっては、温泉の特性や資源量に見合った利用を行うことが大切。温泉資源の量を見誤ると、資源の衰退を招くことになるので注意が必要。有限性を意識し、集中管理等により地域の温泉採取量をコントロールし、利用を効率化する考え方が必要になってくる。
- 自然に湧き、湯煙があがる温泉は地域の宝である。もっと、多くのひとに源泉や温泉の利用方法を楽しく安全に観てもらおう工夫があつて良いと思う。
- 温泉の湯だけでなく、「温泉地」にたっぷり浸かってもらい、「温泉地」のもつ様々な力を味わってもらおうことが新・湯治なのではないかと思う。

意見交換「雲仙温泉の今後の町づくりを考える～雲仙温泉上質化プロジェクト～」

富永氏（雲仙市観光物産課長）：選ばれる観光地、稼げる観光産業を目指して活性化に取り組んでおり、10年後の雲仙温泉の姿を目指す観光戦略の策定に今年度着手した。環境省に作っていただいた国立公園上質化事業のメニューは、雲仙温泉の景観改善の手立てとなるとして、現在取り組んでいる。廃屋旅館や四阿の撤去、古い引湯管の撤去、整備を進めると同時に、雲仙温泉独特の爛付という熱交換システムもアピールしたい。



宮崎氏（雲仙温泉観光協会長）：雲仙は日本で最初の国立公園。他と比べて大変景観が美しい温泉地。雲仙の今後のまちづくりの大きな柱である街の景観美のため、上質化事業に雲仙市、環境省と一体となって取り組んでいきたい。

服部氏（雲仙自然保護官事務所自然保護官）：雲仙の一番の特徴の地獄は環境省の所管地であり、配管が景観を阻害しているとの問題意識が地元にも前からあった。地元での動きと連動して、自分たちの管理する資源に対する管理責任の一部として、地獄の景観改善を強力に推進していきたい。

西村氏：関係者との合意形成のため、定期的にワークショップを開催したり、社会実験を実施し、節目の年には勝負をしかけている。城崎の優れている点は、町を挙げて何かやろうという話が出たときに、町の人が方向性を合わせるのが容易であること。そこそこの町の規模がある割には、話がスムーズに進むのが特徴。住んでいる者が新しいものに挑戦するという気風が必要であるとともに、住んでいて楽しい町にもしていけないといけない。

「チーム新・湯治」への登録状況 ～297会員が参画

平成30年5月に発足した「チーム新・湯治」は、令和2年2月28日時点で297会員の皆さまにご登録いただきました。温泉地に様々な視点から関わるチーム員の多様な活動と、それぞれの関心をお互いに知り、理解を深めながら、“日本の温泉と温泉地”を一緒に盛り上げていきましょう。

《表1 チーム員の種別》

自治体, 15.5%	観光協会・ 温泉協会, 10.8%	ホテル・ 旅館, 16.2%	団体, 20.5%	企業, 27.9%	個人, 9.1%
---------------	-------------------------	----------------------	--------------	--------------	-------------

(n=297,表1単数回答,表2複数回答令和2年2月28日時点)

《表2 チーム員の関心のある分野 上位10》

順位	分野 (全26選択肢のうち上位10)	選択者数	選択率
1	地域資源を活かしたツーリズム	212	71.4%
2	温泉地での健康増進プログラム	193	65.0%
3	訪日外国人観光客に対する取組	166	55.9%
4	自然等を活かしたアクティビティ	160	53.9%
5	温泉地間の連携	156	52.5%
5	温泉の効能	156	52.5%
7	温泉街等のまちづくり	155	52.2%
8	食または料理	152	51.2%
9	温泉地活性化に向けた マスタープランづくり	146	49.2%
10	温泉または文化遺産	120	40.4%